

あびこの文化

発行人
村上智雅子
我孫子市
若松122-6
04(7184)
1804

市制施行五十五周年記念事業

「市民と市民活動のマッチング」に参加して

副会長 佐々木 侑

企画の概要

*名称：市民と市民活動のマッチング！

*主催：あびこ市民活動ネットワーク（我孫子市協力）

*趣旨：各市民活動が時代によるニーズの変化により活動の低迷・硬直化が進んでいる。この企画により活動団体と関心ある市民との交流を設け、新たな市民活動展望や新規会員募集を図り、我孫子市の市民活動を一層盛り上げる企画。

*場所：あびこ市民プラザホール

*日時：令和七年二月十六日 13:30～16:00

令和七年二月十六日（日曜）午前十時～十一時に当会役員全員で集合、指定場所のパネルに①当会案内ポスター、②嘉納治五郎像完成御礼ポスター、③新会員募

あなたの知識、経験を地域で活かしませんか？

市民と市民活動のマッチング！

あなたの経験を我孫子は求めています！

地域の活動

- NPO法人あまごころ
- ふれあい野鳥の会
- 我孫子市社会福祉協議会
- (一社) 生きる
- 我孫子の文化を守る会
- 我孫子市消費者の会
- 手賀沼トラスト
- 我孫子市役所市長歩道加型事業
- まちづくり協議会の活動
- 我孫子市健康生きがいの会
- みんなの広場「風」
- ガールスカウト
- 我孫子の景観を育てる会 など

ワークショップ

- 我孫子おもちゃの病院
- 我孫子の福祉施設商品販売
- (一社) 日本食育協会

2025年 2月16日 日

時間 13:00～16:00
場所 あびこ市民プラザ大ホール

主催：あびこ市民活動ネットワーク
TEL 04-7190-5731 (メール我孫子内)
メール acnw.jimukyoku@gmail.com

開催パンフレット



市民と交流する参加団体の会場風景

集案内ポスター、④活動中の「放談くらぶ」案内ポスターなど掲示、更に机上には、我孫子の文化四〇周年記念誌・会員募集チラシ・その他当会発行会報等を並べ、訪問者に準備した。なお、四〇周年記念誌は訪問者に五〇〇円と格安で販売を予定した。

十三時に開始され、あびこ市民活動ネットワーク代表関口氏より開会の挨拶に始まり、我孫子市市民協働推進課辻氏の挨拶と参加団体名の紹介が行われた。我孫子市もこの企画には協力度も高く、市民協働推進課が各参加団体の事業内容について写真や動画での映像を使用して、詳細に紹介を行って支援している様子が伺えた。

十三時四十五分頃から各参加団体によるステージでの活動紹介（希望団体が始まり、九団体が一〇分程度の時間を使い熱く事業説明・利用者への活用促進を訴えた。会員制団体では、加えて新入会員の加入募集をした。

当初からステージ発表をしない団体には、司会者が各ブースを回りマイクで活動紹介をしていた。

当会でも村上会長代行が、ステージに上がり、会の活動内容・その意義について概略を発表し、嘉納治五郎像完成について市民のご協力に対してお礼と感謝を申し上げ、現在推進させている「ちば文化資産」白樺派と文人たちの郷土の提案について語り、市民と共に活動する我孫子の文化を守る会への協力・参加・発展を熱くお願いした。

十六時、閉会の言葉と共に本事業は成功裏に終了した。当日の結果、当会にも数名ではあるが新会員申込の希望者があり、今回の企画が一定の成果があったものと評価でき、今後の活動の糧となるものと思う次第である。主催者・我孫子市に感謝申し上げたい。

〔参考〕各参加団体：（順不同）

NPO法人あまごころ、ふれあい弁当の会、我孫子市社会福祉協議会、(一社) 生きる、我孫子の文化を守る会、我孫子市消費者の会、手賀沼トラスト、我孫子市役所市民参加型事業、まちづくり協議会、我孫子健康生きがいがいづくりアドバイザー協議会、みんなの広場「風」、ガールスカウト、我孫子の景観を育てる会、我孫子おもちゃの病院、我孫子の福祉施設商品販売、(一社) 日本食育食楽協会、など。



右：挨拶する村上会長代行
左：主催者関口氏



展示場所（ブース）

放談くらぶ

《講話と散歩》

『志賀直哉の『雪の日』を歩く』に参加して

— 知って、歩いて、考える —

参加者 佐々木 徹

◇ 序

志賀直哉や柳宗悦もこの坂を歩き来したのだ。

彼らは書斎やアトリエを飛び出し、連れ立って語らいながら歩いたこともあるのだろうか。帰り道、天神坂を下りながら、そんなことを思った。

令和六年十二月二日、「志賀直哉の『雪の日』を歩く」の講話と散歩に参加した。「我孫子の文化を守る会」放談くらぶの企画で、講師は村上智雅子氏（同会長代行）、司会は佐々木侑氏である。

◇ 講話 ～作品鑑賞

『雪の日』は、大正九年（一九二〇年）二月に、志賀が当時住んでいた我孫子の雪の一日を淡々と綴った短編である。講話では、これを講師の音読も交え作品鑑賞をした。その後散歩と称して、当時の地図を手に作品に登場する何軒かのお店を訪ね歩き、旧柳宗悦邸（三樹荘）、嘉納治五郎邸跡まで散策した。

まず講話だが、『雪の日』の前半部分を中心に鑑賞した。後半の柳邸での会話も取り留めないが、豊かで何と云っても自由な芸術談義で武者小路実篤の反戦小説「或る青年の夢」の英訳のことやフェノロサについての話に及んだが、少し時間が足りない気がした。その分街歩きで補えて丁度良かった。

講話のはじめに、理解のために志賀や家族の紹介もあった。志賀邸跡は書斎部分が再現保存されているが、

今回敷地全体的の見取り図の説明があり、母屋や特に崖上の建物を知り興味深かった。その他にも何枚もの写真映像が用意され、大いに理解の助けになった。

物語は、以前から我孫子での雪を見たいと言っていた友人が来ている日に雪になり、志賀の、子どものように高ぶる気持ちも伺える。女中に行かせる予定の買い物に、自分たちで出掛けた一日が綴られる。音読しながら読み進み、菓子屋、魚屋、肉屋、炭家、米屋、郵便局、八百屋と回った買い物順路を辿った。特に、肉屋については、三谷屋（そば店）の店主から聞き取りをして、コンビニ裏の向かいの駐車場にあった河村肉店であろうと新しい見方を示された。また魚屋では店の人と他愛もない話をした様子が面白い。志賀や武者小路や柳は特権階級のぼつちゃん進取の精神を持った理想家だ。従って我孫子に何年も居たところで仲間内だけの関係で、我孫子町民との交わりなど無かったという見方もあるだろうが、ここでは地元の人との会話が写実的に描かれている。女中任せばかりでなく結構歩いてはいろいろな人と話したのだろう。こうした部分がさりげなくて、実に面白い。

次に、買い物を終えた帰り道、手賀沼湖畔を描写した部分。秀逸で志賀らしく、「私も大好きな一文です」と言う講師の村上氏の朗読には情感がこもっていた。現在は土手が出来たため全く景色が違ってしまったとの説明の後、講師自身で撮った写真を用意された。それは二年前の若松の手賀沼遊歩道付近の雪景色の写真だった。木々や葎に雪が降り積もったモノクロームの写真。志賀の景色の描写、また東洋の墨絵という芸術の前で示した志賀の全くの謙虚な精神、それらを追体験できるような静かな写真だった。様々な問題を心に抱えながら移住してきた志賀だが、我孫子で暮らした数年間に彼の心は穏やかになっていったようだ。

講師のご説明のとおり我孫子が志賀の再生の地だとするなら、この町は彼に何を与えたのだろうか。家庭に起きた出来事の多さだけでなく、東京のような都会の

喧騒が、志賀の心を疲弊させたかもしれない。我孫子に移住し、白樺派など数人の親しい文人との自由な談話が、志賀を安らかにしていったことは確かだろう。一方、自然がそのまま残る手賀沼や周辺の景観をどう感じたか、文人たちとは違い、必ずしも文化レベルが高くはなかったはずの地元の人々とのちよつとした会話をどう楽しんだか。志賀が目で見たりも直接耳で聞いたことをそのまま書いた作家だとするならば、講師のお話から『雪の日』にはその手掛かりがありそうに感じた。

終わりに「白樺のまちの見える化」の活動について、代表者の吉澤淳一氏が紹介され、講話の部を終了し、そのまま地図を片手に街歩きに出た。

◇ 散歩～地図を手に

普段よく歩く道なので格別の感想もなくスタートした。風がかなり強い日であったが昭和二年の地図と現在のとの接点や残る痕跡を探しながら行くと、何やら歴史探偵の気分が楽しくなった。村上氏と交互に案内された越岡禮子氏の説明は、詳細で適切、到底すべての情報量を消化することは叶わなかったが楽しさが倍増した。帰宅後、地図に示された志賀の一日の足取り道順を改めて眺めると、二十一か所に何らかの痕跡（同姓の家や店や何かが残っている）があった。そのうち当時



雪の日の手賀沼（若松遊歩道・二〇一三年一月）



雪の日の手賀沼（文学の広場付近）

と同じ場所で同じ商売が続けられているのは三か所、角松旅館、井坂石材店と三谷屋だった。たかが一〇〇年、それでもやっぱり一〇〇年なのだろうか。

香取神社を経てかつて柳が暮らした三樹荘、嘉納治五郎邸跡まで進み、嘉納治五郎像建立までの長年の活動・ご努力もお聞きした。そして参加者でもあった「我孫子の景観

を育てる会」の中塚和枝会長の一言と講師村上氏の御礼のご挨拶で解散となった。村上氏は「物事には理由と順序がある」と言われた。嘉納が我孫子に別邸を構えたことがきっかけとなり、甥の柳が隣地に住み、その柳が志賀を誘い、志賀が武者小路を連れてきた。それもこれも鉄道が敷かれ、我孫子が都会から一時間の近郊になったことが始まりだと。なるほど納得のいくお話だった。

◇ 結

今の我孫子で、『雪の日』の情景を探すのは難しいが、これからも何かしらの痕跡や残り香を辿れるかもしれない。そんな思いにさせられた今回の講話と散歩だった。そして、あらためて、恵まれた自然や豊かな歴史もあり、白樺派作家や文人在住の痕跡を残す我孫子の魅力を、今後とも関心を持って思いを深めたいと思った。講師と準備・運営のスタッフのみなさんに感謝申し上げます。

《付記》

当日の講話と散歩からは離れるが、最近聞いたことを少しだけ書きたい。

嘉納後楽農園については、白山一丁目の案内板に詳しい説明があるが、それは現在駐車場の出入り口に設置されている。その脇が地区のゴミ集積所となっており、曜日によってはネット一杯のゴミが積まれている。わたくしも自治会役員を務めており、しかもゴミ関係を含む環境・衛生担当であるので、ゴミ集積所の設置や場所の移動には大変苦労することは十分に承知しているし、地元のご事情も存じ上げないので滅多なこととも言えないが、案内板を見に来た人にはいかにも残念な現状であると思う。

その駐車場の隣の大きなお宅が、嘉納後楽農園を閉じる時規模を縮小して引き継いだ松本農園のご関係とのこと。今は金属ネジの会社のような。また、松本農園がいつまで続いたか不明だが、わたくしの住む若松にある青果店が関係あるとも聞いた。店主は三〜四年前に亡くなられたが、おかみさんが店を小さくして続けている。価値のある情報かどうか判断もできないが、ある人の話ではこの店主が若いころ



「嘉納後楽農園の仕事をしていた」と。おそらくは、後継の松本農園の野菜などを取り扱っていたのかと思われるが、おかみさんに聞きに行ったこともなく確かなことは分からない。若松が分譲された最初からある青果店である。

講話↑終了後の参加者
後から3列目中央の
背の高い男性が筆者

我孫子の文化を守る会

令和7年度総会のお知らせ

以下の内容で総会及び記念講演会を開催予定です。会員の皆様、是非ご出席ください。

日時:5月25日(日)13:30～(記念講演会后)

場所:我孫子南近隣センター9階ホール

【けやきプラザ】我孫子市我孫子3-1-2

議題:令和6年度事業報告

令和6年度決算報告・同監査報告

令和7年度事業計画

令和7年度予算、等

記念講演会:総会開催前に記念講演会を予定しています。講師及び講演題目等は、現在テーマ設定中、講師折衝中です。ご期待ください。



散歩終了後の参加者集合写真（天神山緑地 嘉納治五郎氏銅像前）

(連載第11回)

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る》

その5の2

原田京平も出品した「聖徳太子奉讃美術展覧会」にかかわる資料解説

付「太平洋画会・「春陽会」について

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地
(現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘
四一九一三十六) 探訪取材の記

平林 清江(会員)

六、当時の新聞に掲載された奉讃展にかかわる記事
① 一般出品公募をしない聖徳太子奉讃展洋画部への
不満の声

へ 齊藤與里氏が春陽会を脱退す 『聖徳太子展』の
提言が容れられぬ所から

(読売新聞大正十五年三月六日 3面)

「大正十二年の新春に洋画界野党屈指の何れも当千の作家を糾合して成った革新連盟春陽会もその後、林倭衛、裕伊之助の両会員が二科会との関係上未だに何れも去就を決し兼ねて居り昨春、梅原龍三郎、岸田劉生の両会員が或る事情上止むなく脱退してしまふやうな仕儀とはなつたが無論その中心勢力に異動などある筈はなく今日に及んで現に上野竹之台に第四回展を開催中なのだが在大阪の会員與里氏が昨五日春陽会及びその出身団体である太平洋画会を退会した旨本紙に向け特信を寄せてきた、太平洋画会を抜けたなどはまるで問題でないが関西洋画壇に重きをなす齊藤氏までが今又春陽会を脱去するのは氏自身の為めにも亦春陽会の為めにも惜まれる、齊藤氏は退会理由として『今春の

聖徳太子奉讃展洋画部の一般出品公募の主張を春陽会及太平洋の両会に提言したところ不幸にして容れられなかったが為めです』と語つてゐる、以下略

先の「新聞記事」の理解のために

原田京平が参加した「太平洋画会」と「春陽会」について解説する

右の新聞記事に登場する美術団体「太平洋画会」と「春陽会」は、本シリーズの主人公原田京平が参加した団体である。

ここで、先ず原田京平の簡単な経歴を記し、その後「太平洋画会」と「春陽会」の解説を付すことにする。

1895年(明治二十八年)十月生まれの京平は、旧制浜松中学校(現浜松北高校)に入学するも半途退学、洋画家を志して1913年(大正二)十八歳で上京し、先ず「太平洋画会研究所」に入所する。

翌年の1914年(大正三)に日本美術院洋画部研究会員となり、翌年第二回日本美術院展覧会に《男の顔》で初入選、以後八回の入選を果たす。

大正六年からは、京平は、今関啓司・村山槐多・山崎省三ら(美術院研究生の三銃士)と共に、帰国後の山本鼎(同人)の指導を受けるが、大正九年の日本美術院洋画部解散に伴い、同十一年春陽会に参加。同十二年の展覧会に《秋の日》を出品し、以後入選十二回となる。

昭和十一年一月に病没、春陽会第十四回展覧会に、遺作十点が特別陳列される。

それでは、ここで、先の新聞記事の理解のために、原田京平がかかわった、在野の美術団体「太平洋画会」と「春陽会」について、解説しておきたい。

「太平洋画会(たいはいようがかい)」について

1902年(明治三十五年)に、明治期の洋画団体、明治美術会が改称して発足した美術団体。初期のメンバーには、吉田博、満谷国四郎、中川八郎、石川寅治ら画塾、不同舎出身の若手実力画家や大下藤次郎、丸山晚霞ら水彩画の名手が名を連ねた。

当時のジャーナリズムは、黒田清輝、久米桂一郎、岡田三郎助、藤島武二らの白馬会を「紫派」「新派」と呼び、それに対抗する太平洋画会を「脂(や)に派」「旧派」と呼んで対立をおおった。

会の名称は1901年に中川八郎との米欧旅行から帰国した吉田博の発案で、太平洋を渡り、苦難を越えて米国で成功を収めた体験に基づいている。

以上は日経新聞記事から引用。三回にわたる詳細な記事。同会の中心人物吉田博・ふじを夫妻の生涯を解説し、夫妻の作品をカラー版で多数紹介している。一読を御勧めする。なお、太平洋画会における原田京平の活動については、未だ把握できていない。

① 世界を駆けた画家夫妻―吉田博と吉田ふじを

繊細な描写、米国人を魅了(2021年(令和三年)十一月二十八日)日経新聞 日曜版 美の粹)

② 世界を駆けた画家夫妻―吉田博と吉田ふじを

まだ見ぬ風景、山に求めて(2021年(令和三年)十二月五日)日経新聞 日曜版 美の粹)

③ 世界を駆けた画家夫妻―吉田博と吉田ふじを

戦中戦後、画業へ情熱(2021年(令和三年)十二月十二日 日曜版 美の粹)から

「春陽会(しゅんようかい)」について

① 春陽会とはいかなる美術団体か

春陽会は在野における洋画の公募団体として1922(大正十一年)一月十四日に結成され、光風会(1911)、二科会(1914)などに次ぐ一〇〇年の歴史を持つ美術団体である。この一〇〇年の時間の流れにおいて、春陽会は一民間の美術公募団体として、かつては画家の登竜門としての存在意義を發揮し、近代美術史上に名を遺す幾多の優れた作家を輩出してきた。

② 春陽会の設立構想(「絵画自由研究所」・「各人社」について)

ここでは、大正から昭和初期という時代の状況を背景に、春陽会の設立構想と、その誕生までを記してみたい。

春陽会の創立要因について多くの研究者が語っているのは、その後の同会設立の中心的存在であった小杉未醒(後の放蕪)が、1911(明治四十四)に横山大観とめぐらせた「絵画自由研究所」の設立構想である。また、小杉が1913年(大正二)に渡欧し、パリ滞在中に、やはり同地に滞在していた美術雑誌『方寸』創刊以来の友人・山本鼎と計画した「各人社」の構想が挙げられる。

この小杉未醒と横山大観の洋画と日本画のジャンルを越えた「絵画自由研究所」の設立構想は、小杉の渡欧(1913年(大正二))によって実現されなかった。しかし、帰国後の小杉が洋画部の同人として創立に加わった再興院展とその研究所(以下、美術院研究所)においてこの構想は活かされたといえる。それは、同研究所に於いて日本画、洋画、彫刻の各部門の教室を自由に往来し、各ジャンルを自由に学べるというものであった。

再興院展では、当初は洋画部門の担当は小杉未醒ただ一人であったのが、のちに倉田白羊・森田恒友・山本鼎らに加わって、洋画部門の充実がはかられた。この洋画部門の同人となった画家たちは、のちの春陽会創設に大きなかわりを持つていくこととなる。

③ 大正初期における美術界の混迷と新局面(再興美術院・二科会の誕生と、草土社の結成)について

洋画部門を加えた再興院展の再開は、その発足の経緯として大正初期の美術界の混迷が大きな要因となっている。その混迷とは、官展(文展)が日本画部門における保守派と新勢力派との確執解消のために採った公募方法の一科・二科制導入であったが、あまりに不評であったため元のかたちに変更した際、新勢力の代表的存在であった横山大観を審査員から除外した。このことから旧院展系画家たちは文展を去り、大観を中心に在野団体としての日本美術院を再興したのであった。

一方、官展(文展)の洋画部門にあつては、二科制導入を拒否された山下新太郎や津田青楓、有島生馬らは文展に対抗する洋画の団体・二科会を1914(大正二)に結成した。創立メンバーとして石井柏亭、梅原龍三郎、小杉未醒、坂本繁二郎等も名を連ねた。

この大正三年という年は、官展(文展)の対抗勢力として、在野の美術団体である「再興日本美術院」と「二科会」が誕生し、また、翌年には岸田劉生、木村荘八、椿貞雄、中川一政らが「草土社」を結成するなど美術界を取りまく状況は新局面を迎えていたのである。

④ 春陽会の幕開けと理念の確立

大観と小杉の間で話し合われた「絵画自由研究所」の構想を日本美術院の研究所の運営に取り込んで、再開

当初の展覧会では一般審査を洋画と日本画を区別せず同時に行っていた。しかし、三年後には部門別の審査となり、さらに回を重ねることに両部門の作家間の確執が高まったことから、1920年(大正九)の岸本吉左衛門のフランス近代絵画のコレクションの展示問題が契機となつて、洋画部の小杉未醒以下6名の同人が脱会した。これにより、再興日本美術院の洋画部が廃部となったのである。

大正九年に小杉らが再興院展洋画部を退会するが、その当時の社会状況についてふれておきたい。

第一次世界大戦(1914~18)により、日本の経済界は大きく発展し、この好景気に支えられて、我が国では1916年(大正五)頃から空前の美術ブームが到来していた。だが、このブームは小杉らが退会する年の初めには物価急落による反動で、沈静化に向かっていた。しかし、暫くの間、美術界は好景気の余波に支えられて、大戦後のヨーロッパへ多くの日本画家や洋画家が渡り、フオーヴィスムや未来派・立体派・表現主義などの欧米の新思潮を持ち帰って来たものもこの頃であった。また、新思潮のみならず、大正末期にはフランス人の美術商エルマン・デルスニスによって仏蘭西現代美術展が開催され、当時のフランス現代美術を鑑賞する機会が増えた時期でもあった。

こうした美術界を取りまく環境が大きく変動していく状況のなか、小杉たちには絵画自由研究所の精神を核とした新しい団体を立ち上げる構想が浮上したが、小杉は、退会した同人たちのみで新しい団体を起こすことに関しては、一抹の不安を抱えていたという。

ところが、1921年(大正十)、再興院展洋画部を退会した同人に加えて、梅原龍三郎や岸田劉生、木村荘八、萬鐵五郎、中川一政らの有力作家の参加が確定し、小杉の不安が払拭される陣容が組まれたのであった。な

かでも衆目を集めたのは、二科会を脱会していた梅原龍三郎と草土社の岸田劉生の参加であった。

⑤ 創立メンバーの顔ぶれと、共通する表現志向

こうして1922年(大正十一)に結成された春陽会は、翌年に第一回展を開催した。その顔ぶれは、会員として足立源一郎、梅原龍三郎、倉田白羊、小杉未醒(放菴)、長谷川昇、森田恒友、山本鼎らが挙げられる。また、客員としては、石井鶴三、今関啓司、岸田劉生、木村荘八、椿貞雄、中川一政、山崎省三、萬鉄五郎らが名を連ねた。実態としては、梅原と萬を除けば、かつての院展洋画部の面々と劉生を中心とした草土社との合体であり、各々が独自の主張を持つ個性派の集合体といえる団体であった。

なお、共通する志向としては、小杉や森田、萬などは水墨や南画風の作品を、劉生は肉筆浮世絵の影響を受けた作品を発表するなど、各自が東洋画風の表現への傾向を持った画家たちであったといえる。

春陽会の結成当時、同会の中心人物であった小杉未醒は、「我々は各人主義の集団である」と明言している。

これは、この春陽会の理念として運営の指針となっていて、現代においてもその主張は各参加作家の心底に脈々と受け継がれているのではないだろうか。

この「各人主義」であるが、この発想はすでに1913年(大正二)に滞欧中のパリで、小杉と山本鼎の間で計画された「各人社」の構想が元になっており、作家個々の芸術上の考えを尊重し、そのうえで様々な画家たちが集合する団体を創設しようとするものであった。これは、春陽会創設の基本コンセプトとなっている。

春陽会も創立から三年ほど経つと、不協和音が生じ、岸田劉生と梅原龍三郎が1925年(大正十四)の第三回展をもって退会した。これら有力作家の退会によって会の運営が危ぶまれたが、小杉未醒を中心とした創立会員たちは、会としての特色を持った新機軸を次々に打ち出し、公募団体としての体制を整え、その危機を乗り切った。

〈春陽会誕生への序奏 木本文平(碧南市藤井達吉現代美術館館長)〉

「春陽会誕生一〇〇年 それぞれの闘い」所収 部分引用

*傍線は筆者による

以上、「春陽会」の、「その誕生までと初期の歴史およびその特色」について、おおよそのことはお分かりいただけたと思う。

次は、春陽会の最も重要な基本コンセプトである「各人主義」と、同会の画家たちが持つ「東洋画風への志向」について、同会の中心人物小杉未醒と山本鼎の言を借りて考える。

「我々の今度の会がどの種類に属するか、当事者には反てわからないかも知れない。而し現在世界の趨勢では、芸術的主義の一致した会といふものは一つもありません。それがいいか、わるいかは知らず、それは時代と芸術との一致した当然の帰結であらうと思ひます。つまり各人各個主義となつてゐるのです。我々はその如く各人主義です。而し芸術の主義の一致はなくとも芸術家としての主義の一致はあります。その一致が一つの集団となる」とは可能だと思つて居ります。」

小杉未醒(放菴)

小杉未醒談「我々は各人主義の集団である」
『読売新聞』大正十一年一月十五日

「春陽会の同人は何れも洋風画を修行した連中ですが、今日は随意に画業を西洋画の埒外に發展して居ります。(中略)春陽会の者は、素質の殺されて居る冷めた写真嫌ひ嫌ひます。又、技巧を粗末にした大作を軽んじます。蓋し春陽会の特色は、会員等が、前期画生活に於いて悟つたところのリアリズムを経とし、東洋伝統の絵心を緯として一路邁進するところに發揮されるでせう。」

山本鼎

「春陽会の地位及特色」春陽会雑報」第6回展
第一号(春陽会1928年)

小杉未醒・山本鼎による春陽会についての言葉を読み、ここで、思ひだされるのは、「会報あびこの文化」193号掲載の(本シリーズ・連載第二回)の中の次の記事のことである。

筆者と、当時の世田谷文学館友の会の企画委員二名(前出)が、加藤充子氏のお宅に初めて伺つた日(令和元年10月21日)に、充子氏が、原田京平について「日本画家」であったと記憶されていることを知った。そして、筆者は次の記事①と②を書いておいたのである。

① 加藤家の御先代の奥様からの言い伝えで、充子氏(現オーナー)は、原田京平は「日本画家」であったと記憶されているが、このことについて、少し触れてみたいと思う。

原田京平は日本美術院院友であったが、大正九年の同院洋画部解散後は、春陽会に参加、後会友となったが、油彩画の他に墨絵・彩墨画なども描いていたから、御先代の奥様には、そのことが印象に残り「日本画家」と思われたか、と推察される。

遺歌集「雲の流れ」の中に京平執筆の（油絵から水墨へ）という随筆がある。それによると、東洋の墨、筆の良さを讃え、その二つに一層の効果を賦与するものは東洋の紙と絹であり、「さればこれら数種の用意さへあれば、吾等は畫心のおもむくままに直ちに自由自在な表現を為し得られる」として、「油畫から水墨へと移って行った心持ち」を記している。京平は油彩画を描きながら、また、水墨画への志向があり、実際描いていたのである。現在、京平の水墨画・彩墨画の作品は、我孫子市白樺文学館に所蔵されている。

右①の記事からは、原田京平が、実際に墨絵・彩墨画を描いていたことの証言が得られたことになる。図らずも、対面による貴重な証言が得られたのである。

さらに、京平の次女南（ミナミ・アストロゴ）からは、「父は一生洋画家であり、日本画に転向したということはない」との証言も得ているが、これは、平成十九年中（六月二十七日〜八月三十一日、十一回にわたる）に、原田南氏と旧白樺文学館時代のスタッフ（故）矢野正男氏との間で交わされた、国際電話によるインタビューの中で、南の証言である。

② 原田京平は、大正九年の日本美術院洋画部解散後、大正十二年の春陽会第一回展覧会に出品したが、その春陽会の特色のひとつに、油彩画ばかりではなく、水墨画や素描など、あるいは、「東洋的」「日本的」油彩

表現を志向する者が多く、そのことが同会の初期におけるひとつの特徴となっていた。

京平の親しい友人に森田恒友がいるが、森田は小杉未醒（放菴）と共に、春陽会の文人趣味を代表する画家で、その影響を受けてか、実際、京平も水墨画・彩墨画を描いていたのである。

昔のパレットから後のパレット その人生をかけて洋画家として生きた力行の足跡

では、本稿の最後に木村莊八による追悼文（僚友原田君）から次の一節を引いて、春陽会における原田京平の位置付けと、また、原田京平が、その一生をかけて鋭意精進為し得た、洋画家としての「力行」の足跡についても確認をしておきたいと考える。

何事にも「生粋」といふことはそれ自身一つの価値となり又魅力となりますが、故原田君の春陽会に於ける場合がさうで、春陽会は今年で第十四回展を迎えましたが、抑々この発祥を遡るといふと、殆ど二昔以前の日本美術院洋画部迄糸を手繰らなければなりません。すると、その春陽会の歴史を手繰り盡した元のところ、日本美術院洋画部時代に、既に故原田君の投影は有るので、春陽会の生粋とも生粋の一人でした。

此の十四年間に、故人は昔の名の「聚文」時代から晩年の「和周時代」にかけて、缺かさずその年々の作品を春陽会を通して世に向ひながら、次第に向上の道を辿った一選手です。突然に見ると元の聚文君は後の和周君へ百八十度以上の変貌を来してゐるやうにも見える程です。若し故人の最旧作と最近作とをいきなり気無しに

並べて見たならば。―しかしこの「変貌」も、その段階色を仔細に見れば、決して一足飛びのものでないことは明瞭です。

無理な一足飛びでないことが明瞭になると同時に、又、歩調を余程一歩々々踏張つて、力一杯に歩いた行程でなければ、かう、昔のパレットから後のパレットへひとりの人がよく「変貌」出来るものでない。

―その点に認めるところの故人力一杯の精進の跡も、亦、原田君の十数年を仔細に見れば、必ず肯へるものがある筈です。

（僚友原田君）木村莊八 昭和十一年五月識

原田和周遺歌集「雲の流れ」所収

森田恒友については、「あびこの文化」200号にも記載があるが、追加の記事を記すので御参照を。

「私は恒友や鼎、それに石井柏亭らと一緒に同人雑誌「方寸」をだしてから、日本美術院の再興、春陽会の創立と、恒友が数え50でなくなるまで、二十余年の間、彼と行動をともした。この間、彼には表面に立とうという野心も、他を押えつけようという派手な振舞いもなく、私たちは「おばあさん」というニックネームで恒友を呼んでいた。おばあさんのように親切で、多少愚痴っぽかったけれど、柔らかな感じのする人柄だった。

小杉未醒

「問われるまゝに」(4) 森田恒友『朝日新聞』

(1962年6月5日 13頁)

(次号に続く)

(第13報)

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」 (略称「美手連」)の活動に参加して

(会員) 牧田 宏恭

会報「あびこの文化」に連載の本報告は、昨年の第二〇二号(令和六年十一月一日発行(第十二報))に続いての報告になる。

第十二報では、

- ①美手連各団体の主な活動報告(令和六年八月～十月)
- ②都部谷津における特定外来生物(植物)観察会概要報告

- ③「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善のその後

- ④「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材」活用推進報告に絞って報告した。

今号は、それらの進捗状況を含め、その後の主な活動内容につき紹介する。

1 美手連会員・各団体個別の主な活動内容

(令和六年以降、本年一月十日迄に決定済事項含む)

一月十一日に開催の理事・運営委員会にて報告された内容(十一団体)を紹介する。

- ① 我孫子市消費者の会

講演会「デジタル社会と消費者」実施、二月一日、二日消費生活展開催他

- ② 我孫子の景観を育てる会

「我孫子のいろいろ八景歩き」関連協議、日立庭園公開を令和六年十二月七日(土)に実施他

- ③ 我孫子の文化を守る会

美崎会長急逝に伴い臨時役員会複数回開催(会長代行:村上智雅子氏選出など)。

令和六年十一月二十三日 史跡文学散歩:我孫子の白山緑地区を歩くを実施、十二月一日統一クリーンデー参加、十二月十五日:美手連研修会参加、十二月二十二日「放談くらぶ」志賀直哉の雪の日を歩くを実施他

- ④ 我孫子野鳥を守る会

「定例手賀沼探鳥会」令和六年十月、十一月、十二月開催、他地区も開催、「手賀沼水鳥定点観測」

- ⑤ NPO法人アルバトロスコトクラブ

十一月手賀沼清掃、十二月一日統一クリーンデー参加他

- ⑥ NPO法人亀成川を愛する会

令和六年十月十九日水辺の生きもの観察会、十月二十日谷津の生きもの探検隊、シリーズ秋の里山ゴミ拾い、二十九日日本トンボ学会チームと下池整備他

- ⑦ NPO法人せつげんの街

令和七年一月一日・二日 消費生活展ハネル展示プレゼンタ

- ⑧ 大津川の水辺をきれいにする会

川掃除 令和六年十月十三日に新堤橋、昭和橋、十二月一日手賀沼統一クリーンデー(柏参加、水質協働調査・大堀川九地点調査他)

- ⑨ 岡発戸・都部の谷津を愛する会

観察会「流域多オラム企画小学校観察会各小学校にて実施他

- ⑩ 手賀沼水生生物研究会 … 特記事項なし

- ⑪ 流山博物館友の会

令和六年十月十八日松戸宿水と緑の歴史回廊実施、十月二十三日船上講座「フランス楚人冠記念館見学」、十一月十七日川筋を歩く②「権現堂礎とその周辺他

2 都部谷津における特定外来生物植物観察会

同観察会は、令和六年九月二十二日を以てひとまず終了。二年前の令和五年五月に遮光シート(遮光率一〇〇%)で覆った水田の「ナガエツルノゲイトウ」の侵入・

繁殖状況を我孫子市手賀沼課、維持管理している「谷津ミュージアムの会」、「美手連」の三者で検討し、令和七年二月十二日にシートを剥し経過観察実施となった。

当日は(の三者に、千葉県農研機構他の参加を得て二



↑ 写真1・写真2 ↓



十数名にて実施された。(写真1・2)この状況を考察し、結果から、今後の進め方について取り組みを継続することになった。

3 「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善

この問題は既に会報「あびこの文化」にて、その成り行きについて「美手連活動報告」として紹介させていただいている。「千葉県柏土木事務所」から、令和六年六月に「放置船の撤去から作業を進めます」との回答受領済の件だ。令和七年二月中旬現在、高野山新田沼辺水路に繁殖し「廃棄放置船」を覆い隠していた外来特定植物「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」の群落は、昨年の「県の活動」により見事駆除終了。「植生帯」付近の水路は見事に復活した。しかし、「問題の放置船撤去」と続いている。

前報で紹介済の廃棄モーターボートの他、以前から係留?されている観光船らしき古びた「幌付き船」も放置されたまま、未だに変わらない(写真3)。



結果、各所に放置された鉄パイプ造りの「釣り人栈橋」が目立ち、その撤去も待ち構えている。行政の取り組みによって撤去作業が進んでいくことを願う。何よりも、新たな「廃棄・放置物」の発生無きよう市民の「モラルの向上」を祈るばかりだ。

↑写真3

4 豊かな手賀沼をめざす「デジタル教材事業」について

すでに我孫子市(第一小、第四小)、柏市(大津ヶ丘第一小、風早南部小)の教育機関現場にて教材作品の利用が開始されており、「総合学習手賀沼学習」として活動が活発になっているとのこと。

さらに「野外学習」・学校間の相互訪問による研究発表」にまで発展していると「美手連・教材プロジェクト」からの説明があった。なお、教材内容はWeb上で「あびこ電子図書館」「柏市電子図書館」の各図書館のサイトから閲覧できる(各市在住・在勤、各図書館利用カードをお持ちの方)。

5 美手連 研修会「谷津から手賀沼まで」「小さな流域」から考える手賀沼の「これから」に参加

令和六年(二月十五日)日、美手連会員を対象に実施。

①谷津の散策と見学

②レクチャー「手賀沼の自然と歴史について」

の内容で①は柏市柳戸谷津・手賀の丘公園・弘誓院(ぐぜいん)周辺、②は柏市原ノ下・大根切(おおねぎり)谷津を歩きながら学習。「手賀の丘公園ロジック」からスタート。

講師は、「かしわ環境ステーション」の柄澤 康彦氏、山口由木氏により十四名の参加者で実施された。絶好の天気恵まれ、充実した実りある一日を過ごした。「我孫子の文化を守る会」からは、佐藤やす子さんと私の二名が参加。

この行事の目的は、「手賀沼のまわりに残る谷津を観察、手賀沼との関連・手賀沼の環境を守るためには谷津の保全も重要」であるとの理解を深めることにある。

(主な訪問箇所と学んだこと)

1) 泉揚水機場

揚水機により、「手賀の丘公園」内の貯水槽に汲み上げ、これを「円筒分水」に送水、旧沼南町全域へ農業用水として配水している。写真は円筒分水装置(写真4)。

近く改修された「ここから水田に流れ込んでいた」ナガエツルノゲイトウ」などへの対策が講じられる。



写真4 ⇒

2) 柳戸谷津参道と「しぼり水」



写真5 ⇒



写真6 ⇒

「弘誓院」への参道：柳戸谷津大地へ谷津田へ下る道は切通しになっている小径で、出口付近に小さな水路があり、「円筒分水」からの水や付近の斜面からにじみ出た「しぼり水」も入っついて、この付近は「湿原化」しており、水を貯める「枡」内に「サワガニ」が死んでいた(写真5・6)。

3) 弘誓院と柳戸谷津

平安時代創建と伝えられる真言宗「弘誓院福万寺」は、下総第三十三番観音霊場で、境内に天然記念物に指定されている、二本の巨木「イチョウ」がある。

「イチョウ」は本堂手前南側に雄樹(幹回り4.2m)、西側に雌樹(幹回り4.4m)と言われている。

雌樹に「垂乳根(たらちね)」が見られる。写真は「本堂」と「イチョウ」(写真7、8)。

柳戸谷津大地下の「弘誓院」付近迄、谷津が入っついて「手賀沼」と繋がって、「船着き場」になっていたようだ。「柳戸」の「戸」は船着き場を意味する。

4) レクチャー「手賀沼の自然と歴史について」

午前のプログラムを終了。「柏市手賀近隣センター」に到着、昼食を摂った後「レクチャー」に入る。

「手賀沼の自然と歴史について」と題し、環境ステーションの山口さんの説明があった。

この地域の地形誕生の過程、「手下の水海(てがのみずうみ)」に始まり、江戸時代から始まった「干拓」、そこから生まれた「○○新田」の地名、その後繰り返される「利根川氾濫」による「大水害」。明治期の「ポンプによる機械排水」。台地上に「集落」が誕生し、入会地「岩井」「鷺野谷」などになったことなどの説明。



← 写真 8

話は手賀沼の「ウナギ漁」「カモ猟」にまで及んで、さらに「最近の市街地の水」と「保水力」、柏市、我孫子市の谷津保全指針により「自

写真 7 ↓



写真 9 ←

然の生態系維持」を「沼」「大地」「谷津」を一体としてどう捉え、取りこんでいくかを考えたい」と結んだ。

5) 龍泉院〜大根切谷津・原の下谷津

「レクチャー」終了後、午後のプログラム「曹洞宗・龍泉院 建長五(一一五三)年建立」へ移動。脇道を谷津へ降り「大根切谷津」と「原の下谷津」の最奥部両方が見渡せる場所にある場所まで移動。付近の「湧水溜まり」の解説を受けた後、帰路に就いた。写真は「湧水溜まり」(写真9)。

この「研修会」で、またまた身近に「豊かな生態系を育む自然がある」ことを確認でき、今後、次の世代に繋いでいく行動に真剣に取り組む大切さを痛感することになった。

六 「美手連勉強会」

「手賀沼の水面をどう活用して行くか」を検討するため「美手連の勉強会」が二月二十二日に開催された。

テーマは「手賀沼の水面利用と交通整理が必要では?」で、「神奈川大学」の「諸坂佐利先生」を講師に迎え、講座は「自然環境保全政策と観光振興政策の両立とは?」——「法解釈学および法政策字の視点から考える」として「環境保全」を前提とした「観光管理」の実践のみによって実現するもので、単に事業者や観光客の要望に応えるものではない!とし、環境と観光の両立は「環境教育」と「規制」そして「エンカルツリズム」例え

ば旅行者が訪れることで現地の自然環境や社会の持続可能性にプラスの効果をもたらすという新しい概念」であって、その具体的方策は「役務提供」と「募金などの資金援助」で、すなわち「能動」である。

一方「エンカルツリズム」市民・来訪者、ならびに観光資源・設備・インフラを用意する自治体、そして、それらを活用し事業を営む民間事業者」の活動、いわゆる「受動」である。つまり「エンカルツリズム」は従来の「コストパフォーマンス」を重要視する消費行動とは一線を画することが特徴である。

「能動」の一例に「旅先でボランティア活動を行うなどの「利他行動」つまり「役務提供」である。

「自然環境と持続可能な観光の両立」を目指す「政策法務」に「自然環境保全」の「フェーズ」を経て「自然環境保全政策の目的、目標」を「住民の生活を守り、そのために必要な良好・良質な自然環境を守り、景観すなわち「上位概念たる絶対的権利」をベースにした上で「観光客」に「事業者」つまり「下位概念」たる「相対的権利」を守る順序が肝要であると力説された。

現在「我孫子市」「柏市」に存在する「計画」や「方針」は「手賀沼」を観光資源と位置付け「柏市」は「インフラ」や施設の整備などの環境整備を挙げ、「我孫子市」では「水上アクティビティ施設」「観光客をもてなす施設」「観光の核となる施設」を街づくり大綱とし且つ「手賀沼」の環境保全施設「観光の核となる施設」としながら「自然環境保全」も謳っているが、整合性に欠けると諸坂先生は評価している。「観光振興」「地域発展」は否定はしない「そこには「問題や課題」の新たな発生についての「リスクアセスメント」を前提にした「予防原則」が肝要と強調した。これらが我々の今後の活動における大きな「指針」になった。なお、「この講座には「美手連関係者」のみならず「我孫子市手賀沼課」「松戸市環境保全課」「千葉県議会議員」「我孫子市議会議員」の参加も得られ開催されたことを申し添える。

(以上)

新入会員紹介

七十代のでててく人生

会員 下平みどり



七十代も残す所、あと僅か。十年前は、大腸癌からスタート。肝臓でストップした。そのうち目が眩しくて白内障の手術。五年前は車に当てられ、九死に一生を得る。五カ月の入院を余儀なくされた。しかし、今杖を突いての人生だが、多くの方に助けられ、生かされている。

まず一番に感謝は、太陽。洗濯好きの私には、これが一番。洗濯機(二槽式)。お風呂。夏場は四時、冬場は五時起床。歯磨き、洗面、トイレ、床掃除、床上げ、ラジオ体操、外回り水やり、清掃、洗濯&干し、風呂に入る。そして朝食(野菜、果物中心)、毎日心がけているのは、バランスの良い頻回食。適度な運動。睡眠。庭の手入れ。太陽と共に歩む清潔な生活。心身共に明るく楽しい生活。朝食後、ガストに籠る。(我が家は、冷暖房も一台しかない。)冬寒、夏暑い。幸い適当な場所が近くになり、社会の縮図になつているので、自他交流、学習の場となる。目の前は真言宗の寺。最勝院。空海さん最澄さんにも思いを馳せ、先祖、父の姉妹弟へ花を手向ける。ない時は水を取替え、友人知人、村の人の所へも回る。そしてゆつくり墓誌を見る。今の自分を反省し、これからの自分を考える。

幼い頃から書と共にあり、世代を越えての拘わりを大切にしていた。後、何年生かされるか分からぬが、いつも写経の願文に書くのは、世界平和と停戦。(戦争後遺症もバカに出来ぬ。)核軍縮。周辺皆健康無事。我家の屋内安全など。試練は次々やってくる。

見習いも大切と、美術館、博物館へ行ったり、映画や舞台も見、感激したり笑ったり。東京では、人間生物の有様も観察。都市と農村の交流も心がけるが、身の丈も考えねばならぬ。少しの奉仕と生涯現役で生ける様、いろいろ駆使して、努力するしかないと思う。

(令和六年十一月入会)

おひいだより 116号

テーマ

『スペイン、アンダルシアに魅せられて』

ピアニスト 大川 由美子（布佐在住）

日時 四月二十七日(日) 午後二時～四時
場所 〓あびこ市民プラザ 三階 会議室1

我孫子市我孫子四一十一一（旧エス）

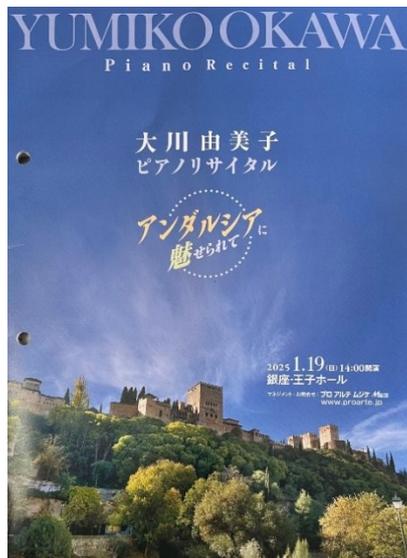
「なぜスペインが大好きなの？」とよく聞かれます。「うん、前世はスペイン人だったかも？」なんてお答えしちゃってます。

「ほんと、何でなんでしょう？ 長年のドイツ生活、どんより曇り空の下二週間以上もお日さまに会えずとても悲しかったのと、友人たちがみんな私より頭一つ分背が高くていつも首が疲れてたのと、冬に大好きなトマトが食べられないのど…」

スペインに行ったらなぜくんが解決。そして後ろから見たら「ほぼスペイン人」すっかり味をしめて超リピーターとなりました。

そしてなによりスペインの音楽です。ドイツの作曲家大好きですよ！ しっかり考えてきちんと組み立てる、のは私の性に合ってます。

放談くらぶ



2025,1,19 のリサイタルパンフレット

大川由美子さん(パンフレットから)



ドイツでピアノを学び、ピアニストになった経緯や、スペインのアンダルシア地方の楽曲に魅せられたきっかけ、古典音楽のピアノの特色、ホームコンサート之苦労話、楽しい話を画像や映像でお話頂きます。ピアノの生演奏はありません。

でも、考えすぎずに心のままに音を紡いでゆく心地良さに魅了されたのです。スペインと日本はどこかでつながっているような気がしてなりません。(リサイタルのパンフレットから)

会員消息

「日々これ好日」

会員 徳永 和秋

小生が、我孫子に住むようになってからもう三十年以上になります。それまで東京・世田谷に住んでいましたが、子供が生まれア・パートが手狭になったので、通勤に便利な路線を探した結果、始発でしかも乗り換えなしで大手町の会社や国会議事堂に行ける我孫子を選びました。仕事は、新聞社の政治部記者で、昭和二十二年生まれの団塊の世代。現在は、政治ジャーナリストを務めています。

今も在社中とほとんど変わらぬ多忙さで、週に一二度国会に通い、ネタ(材料)を仕入れ、月刊誌に記事を書いたり、講演の講師を務めたり、X(旧ツイッター)に投稿したりとあわただしい毎日です。

我孫子に住んでつくづく感じるのは、文化の香りが強く、かつ風光明媚なこと。有名な文人たちの家屋や別荘の跡地がたくさんあり、その香気に触れながら、毎日を通すことができ心から感謝しています。因みに拙宅は、志賀直哉邸跡地から約二〇〇メートルの場所に位置していて、志賀直哉と毎日バツタリ出くわすような気分になります。我孫子が「北の鎌倉」と称されるのもムべなるかなと感じ入っています。

小生の趣味は、多彩で読書、書道、落語、カメラ、モノマネ、刀剣鑑賞などです。落語は一小(我孫子市立第一小学校)正門近くの商工会館で毎月第三日曜日に行われる「寿寄席」に毎回足を運んでいます。前座、一ツ目、真打がそれぞれ登場し、大いに笑った後の爽快感はなんとも言えません。悩みごとがあれば落語を聴いている間は忘れてしまうこと請け合いです。

カメラは支局(県庁所在地)勤務の折に訓練を受けたもので、本社と違い支局にはカメラマンがいないので自分で書いた記事用の写真は自分のカメラで撮ることになっています。

今よく撮っている写真は、我孫子から冬季によく見える富士山です。よく撮れた写真は、国会議員や秘書たちへ渡していますが、とても喜んでくれています。



第五十一回短歌の会 一月二十一日開催

懐かしい気持ちで送る年賀状

梨の礫も多くなりゆく

身の不調友と電話でこぼし合う

なぜか元気が出ると笑いて

納見 美恵子

風呂そうじ孫が毎日してくれる

のんびりつかるこの幸せよ

陽の光感じて目覚め気がついた

雨戸おろすの忘れているかな

前原 安世

『せる』と言ふ着物を着ており立居する

母のほのかな匂ひなつかし

死顔を知らざれば常にのけぞりて

笑ふ師がわれに頭(た)ちくる

伊奈野 道子

逝きてより新たに会おう大人の

重ねし仕事楽の音知りて

米求め道の駅までペダル漕ぐ

酷暑の夏のミニ米騒動

村上 智雅子

哀悼は逢いたい気持ちと気付いても

骨壺の君応えることなし

この街に映画館ありそのこやで

小百合に憂き身の青春のひび

佐々木 侑

人気なくオオバンの群岸に来て
芝を啄む春も長閑に

玄関の脇に咲くバラ主も無く

空き家知らぬか凜として待つ

芦崎 敬己

当会の行事予定

□「放談くわいど」

日時 四月二十七日(日) 14:00~16:00

会場 あびこ市民プラザ 会議室I

〔先着 三十五人〕

講師 大川由美子氏(ピアニスト)

演題 「スペイン アンダルシアに魅せられて」

○参加費 会員無料、非会員三〇〇円

問合せ ☎(090)22594-0425(佐々木)

(9ページ)あびこだより」を(参照下さい)

□プロジェクト「短歌の会」

第五二回短歌の会

日時 三月二六日(水) 13:30~

第五三回短歌の会

日時 五月二七日(火) 13:30~

場所 けやきプラザ10階小会議室

□プロジェクト「巨木、銘木をめぐる会」

日時 四月二六日(土)

場所 千葉大学 西千葉キャンパス

集合:我孫子駅改札口九時集合

連絡先 佐々木 090-22594-0425

□令和七年度総会

日時 五月二五日(日) 午後二時

場所 我孫子南近隣センター 九階ホール

(けやきプラザ)

初級古文書講座

受講生募集 (先着30名)

主催: 我孫子市史研究センター

後援: 我孫子市教育委員会

身近(根戸・柴崎・取手)に存在する古文書を優しく
解読の要領を学びつつ江戸時代の人々の生活になじみ
ましょう。

日時: 令和7年3月18日(火)・27日(木)・
4月10日(木)

場所: 我孫子南近隣センター(けやきプラザ8階
第1会議室)

講師: 東日出夫氏(我孫子市史研会員)

参加費: 二五〇〇円(講座の初日に集金します。

一回の参加でも同じです。)

申込方法: ①氏名、②住所、③電話番号を明記し、

メール又は電話で申し込んで下さい。

申込締切: 三月一四日(金)

申込先: 090-86526-4628 東

メール: fwi0243@com.home.ne.jp

編集後記 ▼二月二十八日、ドナルド大統領とゼレ
ンスキー大統領との「会談決裂」には驚いた。感情的
で大人気ないケンカの様相だ。当事者抜き交渉や
ディール(商談)基盤の外交に驕りを禁じ得ない。▼

三月十一日は、東日本大震災から十四年。漸く復
興の時、大船渡市の山林火災には心が折れる。▼コ

メや野菜の価格高騰、一体どうなっているのか。「消
えたコメ」「転売ヤー」と訳分からん。減反政策から

転作奨励金制度、もう考え直す時期ではないだろ
うか。▼会報紙あびこの文化の紙面に今号から新

しいコーナーを設けた。会員相互の理解
とホツと出来る親しみ易さを求めて

今後も紙面づくりに努めていきます。

どうぞ宜しくお願いします。(あしたか)

